第3種郵便物認可

記者の視点

阿部 研一
社会部

子ども食堂

「居場所」与える場に

食事をろくに与えてもらえず、スナック菓子で空腹を満たしている児童生徒が、県内にも少なからずいるという。そんな子どもの支えとして期待されるのが、温かい食事を無料または安価で提供する「子ども食堂」だ。

地域住民が主体となって運営する子ども食堂が生まれたのは2012年。学校給食以外の食事が1日にバナナ1本だけという児童がいたのをきっかけに、東京都内で始まったとされる。今では全国の約2300カ所で開かれ、年100万人以上が利用している。それなのに、徳島ではいまひとつ浸透していない。

県内で子ども食堂が定期的に開かれているのは徳島、三好、板野の3市町、計8カ所。都道府県別では2番目に少ない。なぜ活動が広がらないのか。

理由に挙げられるのが、資金繰りの苦しさだ。無料または安価という性質上、利用者が増えるほど運営者側の負担は重くなる。

三好市池田町マチの住吉千恵美さん(63)が月1回開く子ども食堂は、オープンから間もなく2年。当初は約70人が訪れたが、大勢が過ごすにはスペースが手狭なこともあって、今は半数以下に減った。「大勢に利用してもらえるように近くの車庫を改修したいが、費用が…」と話す。肉や魚は自費で購入しており、月1回開くのがやっとだ。

万が一の事故に備えた保険に加入すれば、さらに負担は増す。こうしたハードルの高さから、開業を目指したものの断念したケースもあるという。

高知は60ヵ所で開設

どうすれば増えるだろう。好例が近くにある。隣の高知県では60カ所を超え、中四国で最も多い。

大きな要因は、県が賛同者から寄付を募って基金を創設し、開業や運営の経費に充てている点だ。さらに、スーパーや市場が食材を無償提供したり、家主が家賃や光熱費を徴収しないという形で協力したりすることも珍しくない。食堂開業を促進する「高知あいあいネット」の青木美紀代表は「多方面からの協力のおかげで店を立ち上げる際、壁にぶつからない」と言う。

徳島も高知と同じように地域で支える機運を醸成するには、子ども食堂をもっと広く知ってもらう必要がある。認知度を高めるためには、「貧困対策」から「子どもの居場所づくり」への発想の転換が必要なのではないか。そう考えるようになったのは、徳島市で4月末に開かれた子ども食堂関係者の交流会を取材したからだ。

講師に招かれた支援団体「こども食堂安心・安全向上委員会」代表の湯浅誠法政大教授は「まず協力者を増やすのが大切。みんなで子ども食堂を支え、地域になくてはならない存在にしてほしい」と訴えた。

子ども食堂に通うことで貧しいと思われるのが嫌で足が遠のいたり、「経済的に恵まれない家庭の子どもが利用する場所なので、行くのをためらう」と誤解されたりする。どんな子どもでも気軽に利用できる場として認められれば、地域ぐるみで支える雰囲気が生まれるのではないだろうか。

「貧困支援」超え交流を

徳島市内で月1回、NPO法人フードバンクとくしまなどが開いている子ども食堂をのぞいた。10～70代の調理や子どもの食事の前後はおなどでコミュニる。教職を志す教えることで、なる。60代の民遊んでいるようえる」と生き生

既にそこは、支える場にとどい世代が交流す

貧しくはない遅い家庭の子どに、電子レンジ品を一人で食べ話も時折聞く。供する「子どは、そうした「ことにもつなが

地域の付き合だからこそ、民に始まった取り付かせたい。温囲気の中で、子して幸せなひと る場は、多い方ら。

子ども食堂で食事を楽しむ家族連れ＝徳島市のヒューマンわーくぴあ徳島

沖縄・本

基地のな

沖縄県宜野湾市で開
で、基地のない平和な
訴え気勢を上げる参加

地がなくなることを願ったが、現状は変わっていない」と憤った。

沖縄では昨年10月、普天間飛行場所属のCH53E大型輸送ヘリコプターが東村に不時着、炎上し、同12月に

雅子さま

説明した
所では蚕12
飼育し、昨
ぎの繭を収

皇居に入ら
夫妻＝13日
半蔵門（代